

SDGs 意識・行動変容調査

ー（その1）学習効果によるコンピテンシーの変化ー

白鳥 和彦

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 大学院環境学研究科 教授

要約

SDGs への関与度と意識・行動の変容調査を、当学科および都内私立大学2校の学生を対象として行った。SDGs に関する多岐選択 50 問に回答することで、想像力、情報力、学習力、行動力、達成力の5つのコンピテンシーのレベルが評価できる Web アンケートシステムを用い、前期末/後期初めに1回目、後期末に2回目の調査を行い、この間における変化を比較分析した。2回目の調査では、想像力、情報力、学習力が、いずれの大学でも向上していた。当学科学生では、1年生の向上が見られる一方、2・3年生では向上の度合いが小さかった。また、行動力や達成力については、3校とも多くの学生で向上が小さかった。これらの結果は、環境や社会問題に関する学習の度合いに関係するものと推察でき、今年度はコロナ禍の影響により、SDGs の意識が向上しても実際の行動として現すことが出来なかった点も挙げられる。継続して意識・行動変容に影響を与える因子・要因を探っていく。

1. はじめに

(1) 背景

持続可能な社会に向け世界が動いており、2015年に持続可能な開発目標(SDGs)やパリ協定が採択されてからは、その動きが一層大きくなっている。武蔵野大学においても、2019年にSDGs実行宣言を発表し、各学部、学科の専門分野を生かしSDGsの取り組みが始まっている。

朝日新聞(2020)や電通(2020)によれば、ミレニアル世代やZ世代のSDGsに対する認知度は高い。一方で、Edelman(2019)によれば、米国でのミレニアル世代やZ世代は、環境問題や気候変動問題に対して高い懸念を示している一方、SDGsに精通しているのはわずか30%であるとしている。川久保ら

(2020) は、男女各世代で環境や社会課題に対する意識調査を行った結果として、ミレニアル世代や Z 世代があらゆる環境・社会問題に意識的であると必ずしも言えないとしている。

しかしながら、これからの社会を担う若者世代が SDGs を知り、SDGs を意識した行動は必然になると言えよう。そのためには、電通 (2020) が示すように、若者が SDGs を知る機会としては学校の授業が多く、教育機関の果たす役割は大きい。

(2) 先行研究

上記の問題意識に対し、加渡ら (2020) は、SDGs の学習の変化が個人のキャリア形成における持続可能な能力開発に与える影響についての調査を行っている。大学生を対象として SDGs に関連する「消費者市民社会」の講義 15 回の開始前と終了後に、理解度と意識・行動の変化に関して自己評価、および後述する SDGs サーベイにより回答の変化を分析している。その講義の前後で SDGs に関する情報力、行動力、達成力の向上が見られるなど、講義を通過点として意識や行動の変容が得られているとしとしている。

また、薄羽 (2021) は、2018 年 9 月～2021 年 1 月の間に行われた SDGs サーベイの結果のなかから、SDGs に関連する学習機会により、意識・行動レベルが向上するとの分析をしている。

現在 SDGs に関する情報はネットやマスメディアに多くあふれており、アクセスしようと思えばいつでも利用できる状態にあるが、SDGs は関連する領域や環境・社会課題が広く、網羅的に知識を得るには効果的かつ効率的に進めるための意図した学習が必要である。学生の意識変容を考えたときに、それまでの SDGs に関する知識や行動レベルや現在の学習状況の違いなどにより、SDGs の意識・行動変容を向上させるべき学習機会、行動変革のきっかけづくりは異なるものであるべきはずである。様々な属性の学生に対し、どのような学習内容や行動きっかけを提供すべきか、そのような調査研究はまだ十分されていない。

(3) 本研究の目的

そこで本研究では、学生の SDGs に関する意識・行動変容につながる要因を、

属性や学習状況の違いで比較する。それにより、どのような学習や行動が効果的に SDGs に関する意識・行動変容向上させていくか、今後の学習やカリキュラム策定に活かすことが出来る。

この研究は学生の意識・行動変容を追跡することから継続的に行う必要があるが、初年度は環境・社会問題に関する学習効果についての調査分析を行った。

調査にあたり、環境や SDGs に関する学習が多いと、SDGs の意識や行動レベルが高くなることが想定出来ることから、①環境系の授業が多い学生は、SDGs の意識や行動レベルが高い、②環境系の学習年数が多いほど、SDGs の意識や行動レベルが高い、との前提をおいてこの検証を行うとともに、属性により SDGs に関する意識・行動変容の差異を見出すことを狙いとする。

2. 研究の方法

当大学環境システム学科の学生（以下 M大学という）、都内私立女子大学経営系学部（以下 A大学という）、都内私立大学経営系学部の学生（以下 B大学という）を対象として、下記の方法をとった。

- ①オンラインによる SDGs サーベイを利用し、間隔を空け2回実施し、その間の意識や行動の変化について比較。
- ②上記サーベイ結果の分析を補足するために、サーベイ2回目の回答後に、学生自身が意識や行動の変化をどのように認識したか等について定性的なアンケートを実施。

(1) SDGs サーベイについて

この SDGs サーベイは、一般社団法人日本エシカル推進協議会（以下 JEI という）のエシカル教育ワーキンググループが開発したプログラムで（筆者はワーキンググループメンバーとして開発に関与）、web で設問に応じた回答をすることで SDGs の学習や行動に関する自己診断を得ることが出来るというプログラムである。設問は、「SDG INDEX & DASHBOARDS」2016 に関わる指標を参考に SDGs やエシカルアクションなど身近な生活視点から成る設問が設定されている。想像力→情報力→学習力→行動力→達成力の成長モデルから、これら

5つのコンピテンシーに対し各々10問、計50問の設問となっている。実際にWebで回答に際しては、いわゆる回答慣れを防ぐため、50問がランダムに質問されるようになっている。設問内容を付表1に示す。50問全て7段階の多岐選択による回答を行う。各質問に対し、「とてもしている（とてもそう思う）」を10ポイント、「している（そう思う）」を7.5ポイント、「たまにしている（たまにそう思う）」を5ポイント、「わからない」を-3ポイント、「あまりしない（あまり思わない）」を-5ポイント、「していない（思わない）」を-8.5ポイント、「まったくしない（まったく思わない）」を-10ポイントとし、各コンピテンシー10問で積算し、最高100ポイント、最低-100ポイントとなる。回答者は50問の回答後に、5つのコンピテンシーレベルがレーダーチャートで示され、回答者自身で自身のレベル確認をすることが出来る（図2.1）。なお、回答者には50問それぞれのポイントは示されない。



図 2.1 SDGs サーベイ コンピテンシーレベル評価提示例

(出典：JEI Web サイト)

(2) 定性アンケートについて

一定期間を空けて2回のSDGsサーベイを行い、2回目のサーベイ後に、対象とする学生自身の認識として、1回目と2回目でのコンピテンシーが変わったか、変わらなかったか、それらの考えられる理由等について自由記述にて調査した。調査は、google formや大学のLMSでアンケートを回収した。またM大学においては一部オンラインでのヒアリングを行った。

(3) 調査対象および SDGs サーベイ実施時期

M大学では環境システム学科に属する1年生～3年生を、A大学では環境経営に関する講義を受講する3～4年生、B大学では同じく環境経営に関する講義を受講する2～4年生を対象とした。M大学では、各学年において環境系の講義を履修している。A大学、B大学は経営系の学部であり、カリキュラム上では環境系の講義は少ない。

3大学でのSDGsサーベイは、9月または10月に1回目を、2回目は1月または2月に2回目を行い、約4か月の間隔を空けた(図2.2)。サーベイの実施にあたっては、学生に対しSDGsサーベイのurlおよび入力方法を伝え、各自が自由時間にサーベイへの回答を行った。サーベイへの回答は任意であるとともに、所属大学名(M大学においては学年)、男女の判別以外、個人が特定できない無記名での回答とした。

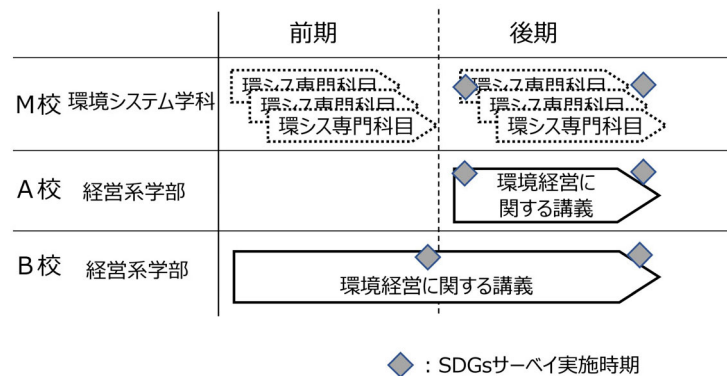


図 2.2 調査対象学生およびサーベイ実施時期

3. 結果および考察

(1) SDGs サーベイの有効回答数

JEI のシステムより、調査実施時期に回答があり、属性が3大学と判別できる回答データ(50問の素点)を抽出した¹。2回目については、2回目の回答であるデータのみ抽出した²。有効回答数は表3.1の通りである。

定性アンケートについては、この調査で狙いとしている2回のサーベイの比較がし得る回答として、A大学64件、B大学60件が抽出出来た。

また、1回目、2回目、定性アンケート回答の関係性については図 3.1 のようになる。

表 3.1 SDGs サーベイ有効回答数

	1回目	(うち男子)	(うち女子)	2回目	(うち男子)	(うち女子)
M校	83	(42)	(41)	26	(13)	(12)
(うち1年生)	(25)			(5)		
(うち2年生)	(32)			(16)		
(うち3年生)	(26)			(5)		
A校	63	(0)	(63)	31	(0)	(31)
B校	168	(99)	(69)	127	(76)	(51)

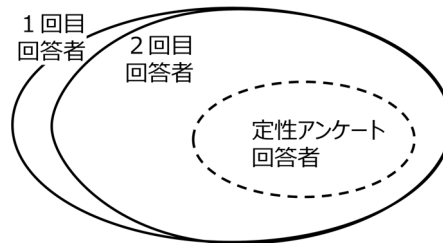


図 3.1 SDGS サーベイおよび定性アンケート回答者の関係性

(2) サーベイ結果分析

1) 全体傾向と学習効果について

JEI のシステムより抽出した第1回目、第2回目の回答データより、2. 1節で説明したコンピテンシーレベルについて、回答者平均ポイントを算出した。図 3.2a~c に示す。後述する考察のため M大学における学年の違いの結果を図 3.3a~c に示す。第1回調査における設問毎の平均ポイントを図 3.4 に示す。この図の横軸は付表 1 に示す 50 問の設問となっている。

結果を見ると、①調査1回目の回答3大学とも同様な傾向である。②3大学とも1回目、2回目とも想像力や学習力が高い一方で行動力が小さい。③1回目の調査では、各設問の回答状況、すなわち意識・行動レベルは3大学とも同様の傾向を示している。④2回目の調査では3大学ともコンピテンシーレベルが向上している。A大学がその差が一番大きく、M大学では差が小さい。⑤M大学の2、3年生では1回目と2回目の差が小さい、いった特徴がみられる。なお、各大学とも男女の違いは有意な差がなかった (図は省略)。

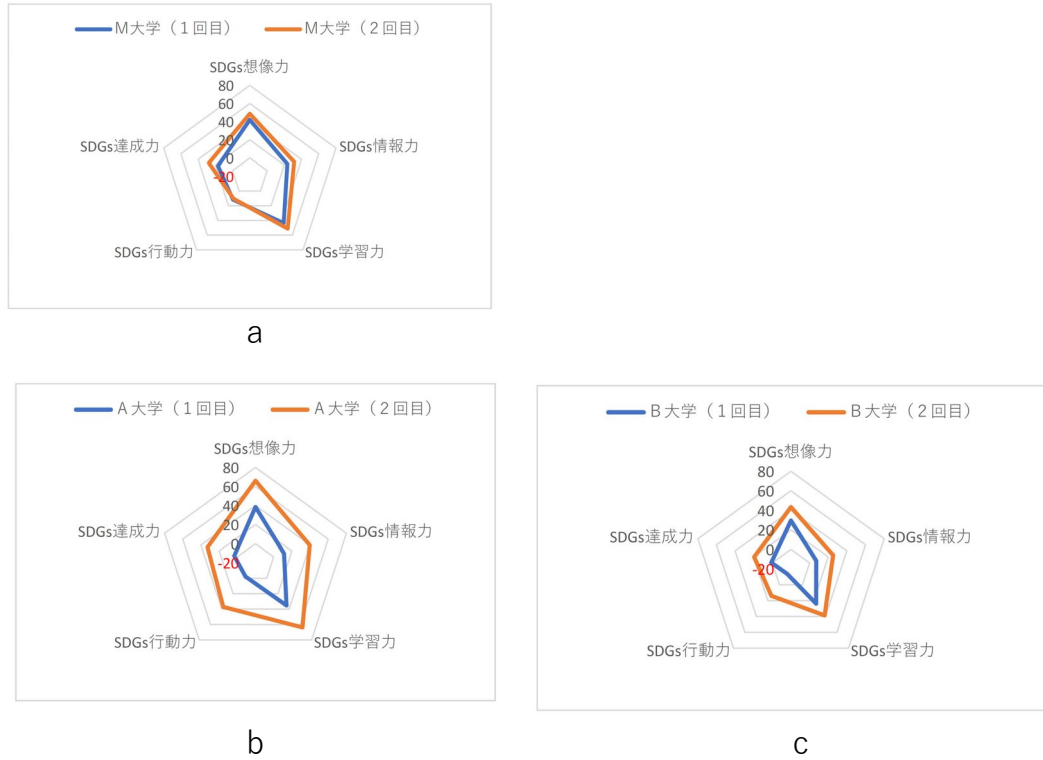


図 3.2 大学別のコンピテンシーレベル (1回目、2回目)

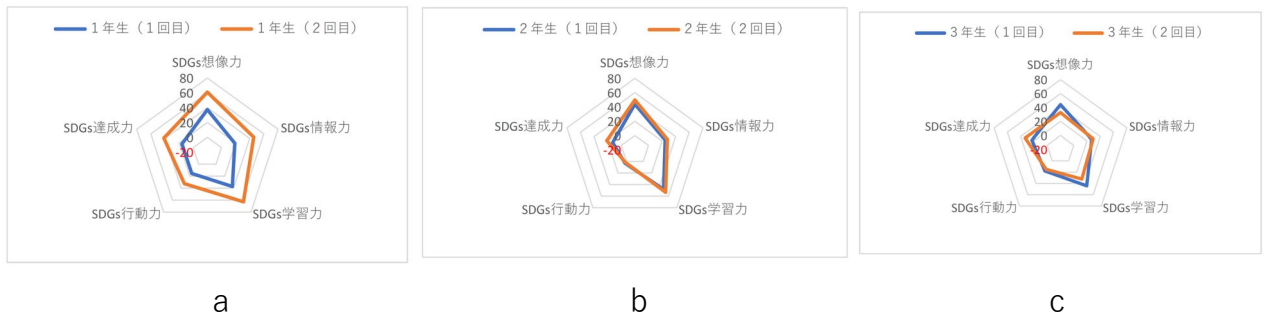


図 3.3 M 大学 学年別コンピテンシーレベル

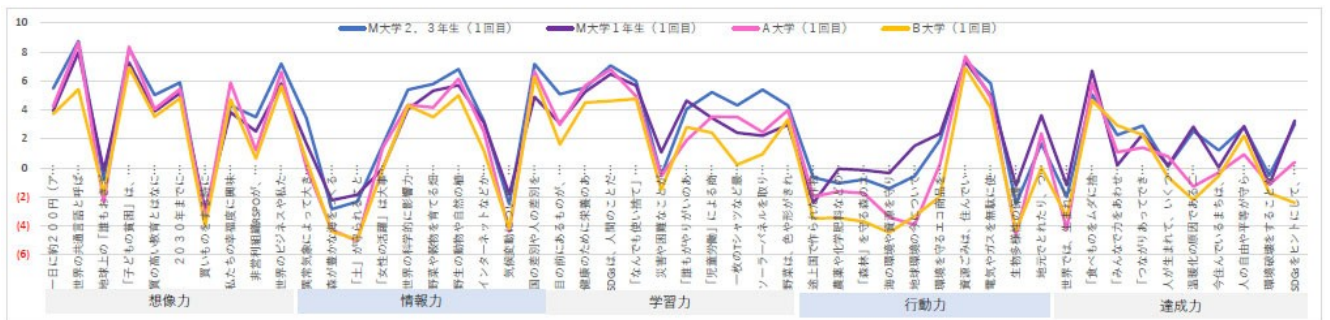


図 3.4 サーベイ回答ポイント (第1回目調査)

図 3.4 に示すように、50 問の回答傾向が 3 大学とも同様であったことについては、学生の世代の関心事は、属性によりレベルの異なりがあるが、属性によらず同様であることが判る。ポイントが低い設問は、想像力では、買いもの際は安いものの方が買いやすいし値段で決める。情報力では、山や森がどのように守られているか、地域の人たちと調べることがある。どのような種がどのような畑でどのように育てられどのような作物が私たちの毎日の食事の栄養になっているか調べる。カーボンフットプリントを計算して生活の仕方をよく考えている。学習力では、どのようにして「レジリエンス」が守られているか調べてよくわかっている、などである。これらから学生は、サプライチェーンや社会的関係性に関する知識が十分でないと考えられる。

上記 1 回目・2 回目のコンピテンシーレベル、2 回目の差分については、加渡ら (2020)、薄羽 (2021) の研究結果とも一致する。環境系の授業が多い学生は、SDGs の意識や行動レベルが高い、つまり環境系の学習年数が多いほど、SDGs の意識や行動レベルが高い、との前提に立てば、M 大学 > A 大学 > B 大学 となることが予想され、1 回目の調査結果はこれと符合する。

一方、2 回目の結果では、コンピテンシーレベルのポイントとしては、A 大学 > M 大学 > B 大学 となり、向上レベル (差分) としては、A 大学 > B 大学 > M 大学 となった。M 大学における差分を学年別にみると、1 年生 > 2 年生 ≒ 3 年生 となった。

この 2 回目の結果からは、環境のことをあまり勉強する機会が無かったであろう学生 (A 大学、B 大学、M 大学の 1 年生) にとって、環境系の授業の効果が寄与していると言えよう。定性アンケートのコメントでは、授業 (環境経営に関する講義を通じて、または他の講義を通じて)、環境や社会の問題に対する知識が深まった。この授業や他の授業、ゼミなどで学ぶ機会が増えた。自分からさらに調べるようになった、といった意見が多かった。

2) 行動力について

行動力の項目が、1 回目、2 回目の調査とも低く、また想像力や学習力の項目に比べ 2 回目の調査であまり向上していない。

定性アンケートで、学生自身が認識している「変わった (向上した) 点」と、

「変わらなかった点」の関係性見ると図 3.5 のようになる。ここでは、回答数が十分に得られた A 大学と B 大学について分析している。円の大きさが該当する回答数である³。A 校と B 校で同様な傾向があり、1 回目の調査から 2 回目の調査の間に、情報力や学習力が変わったが実行力が変わらない、つまり学習の効果はあるが、実際に行動に移せていない、と回答した学生が多数ということがわかる。一方で、行動力が変わったとの回答も若干ある。図 3.6 に、B 大学の 1 回目と 2 回目の回答バラツキを示す。A 大学でも同様な結果であった(図は省略)。他の項目に比べて、2 回目の調査では実行力がよりバラツいている。行動力についてはいくつかの要因が影響していると考えられる。行動力に関して学生の回答ポイントが低かった行動力に関する設問は、フェアトレードのマークの商品を購入する。有機 JAS マークの農産物、加工食品、飼料、畜産物を買う。FSC マークがついている紙や鉛筆、文房具や家具を買う。MSC や ASC マークがついている魚、加工品を買う。地球環境の今について「地球一個分」の暮らしを考えることがある。レインフォレスト・アライアンス認証の商品買う、である。



a A 大学

b B 大学

図 3.5 1 回目と 2 回目の意識変化の相関

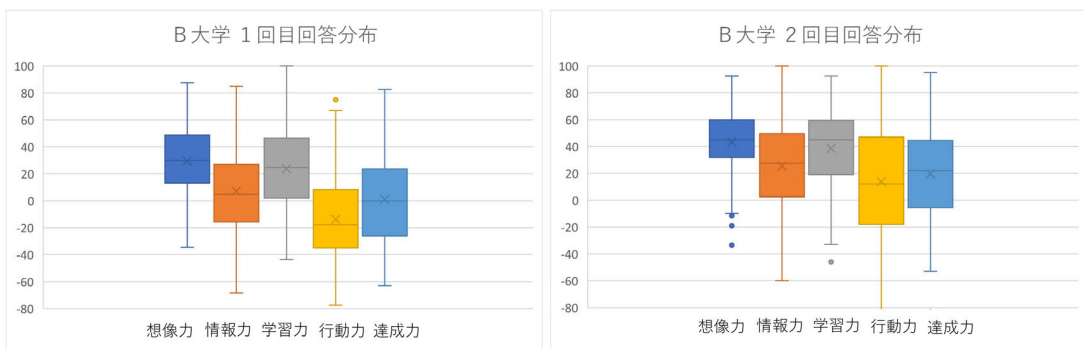


図 3.6 サーベイ回答バラツキ (B 大学)

この結果の要因としては、2020年はコロナ禍で外出やさまざまな行動・実践が出来なかったことが大きいと考えられるが、経済的に余裕のある買い物は出来ない、実家暮らしで自分自身では買い物に行く機会が多くなり環境に優しい製品や食品を買うことがない等といった学生特有の事情も要因と考えられる。定性アンケートでは、知識は深まったがまだ行動に移せていない。外出など行動を控えていた。買物の際にエコマークを探したり日本で作られているものを選んだりすることは少しめんどくさいとあってしまっている。まだ他人事と感じてしまっている。自分自身の身近な取り組みしか意識していない、といった意見があった。

一方で、図 3.5 からは、2 回目の調査で実行力が向上した学生もいることが判る。これらの回答者の定性アンケートからは、商品を購入する際に環境や SDGs を意識するようになった。省エネや省資源に気を付けて行動するようになった。環境に配慮された商品かどうか確認してから進んで購入することが増えた。情報を知ったから（知らなかったことを授業で知り）実践に生かすことができたといった意見があり、学習による意識向上から実践につながっていることも確認できた。

3) 学習経験の違いによる意識変容について

図 3.3 c からは、環境系の学習機会の多いはずである M 大学 2, 3 年生の 2 回目のポイントの差が小さいことが分かるが、この要因を考察してみる。2 回目の調査で 50 問の回答ポイントがどの程度変化したかを図 3.7 に示す。プラスに表れているものは 1 回目から回答ポイントが向上した設問、マイナスに表れているものは、回答ポイントが向上しなかった設問である。注目すべきは、他大学は 2 回目で回答ポイントが向上しており、かつ M 大学 2, 3 年生の第 1 回回答は一定レベル程度にありながら 2 回目の向上がなかった設問である。

具体的には、想像力で、「質の高い教育とはなにか、誰もが学ぶことができるようになるとなぜいいのか、想像できる」。学習力で、「一枚の T シャツなど最終製品ができあがるまでのオーガニックコットンやウールなどの原料について、オーガニックテキスタイルの世界標準などから、どのように環境への配慮や社会的な責任があるのか調べたい」。行動力で、「海や環境や資源を守りながら漁

業や養殖の持続可能な環境を配慮した MSC や ASC マークがついている魚、加工品があれば、必ず選んで買う」。「環境を守るエコ商品を必ず選んで買っている」という設問である。

関連する学習経験・知識がすでにあるものの、この調査期間では伸長につながるものが無かったのか、環境面には知識があるもののサプライチェーンや社会課題にはまだ十分な知識が得られなかったのか等の要因が考えられる。この点については継続して調査すべき課題として見いだされた。



図 3.7 サーベイ 2 回の回答の差分

4. まとめと今後の課題

(1) まとめ

本研究では、SDGs の意識・行動レベルの変更にに関して、3 大学の学生を対象にして、Web アンケート方式の「SDGs サーベイ」を用い、想像力、情報力、学習力、行動力、達成力の 5 つのコンピテンシーとして、約 4 か月の間隔をあげ、2 回の意識・行動調査を行った。

その結果、1 回目の調査では、レベルに多少の差があるものの、3 大学生ともどのような関心事、意識・行動レベルであることが確認できた。

2 回目では、5 つのコンピテンシーのうち、想像力、情報力、学習力が、いずれの大学でも向上していた。この結果から、SDGs 意識・行動の向上に学習・実践の機会が役立つ。

一方、行動力や達成力については、3 校とも向上が小さかった。学生の属性により学習内容・レベルはことなるが、学習機会が SDGs の意識向上に資していることが確認できた。2020 年度はコロナ禍で行動や体験の機会が少なかった

こともあり、行動力や達成力が向上しなかったと考えられる。学生の特性を考慮した学習・実践方法を提供していくべきである。

(2) 今後の課題と展望

今後、SDGs に対する意識・行動変容をさらに促すために、様々な属性の学生に対しどのような学習内容や行動きっかけを提供すべきか、より詳細に検討するため、継続的な変容調査が必要である。今回対象とした属性の学生の意識がさらなる学習や実践でどのように変わっていくか。学習機会がまだ十分に得られていない学生は同様の傾向であるか、等である。前者は、今回調査対象とした M大学の1・2年生に対して継続的に調査をすることが出来る。後者は、A大学やB大学と同様な属性の学生の母集団を増やしていくことである。

また、学習や実践経験が増えるにつれコンピテンシーレベルが常に比例的に向上せず、ある程度の学習や行動経験により飽和状態となることも予想できる(図 4.1)。どのような学習・行動経験が、意識変容、コンピテンシーレベル向上に有効となるのかを、学習内容や実践内容との関係性を掘り下げて検討する必要もある。

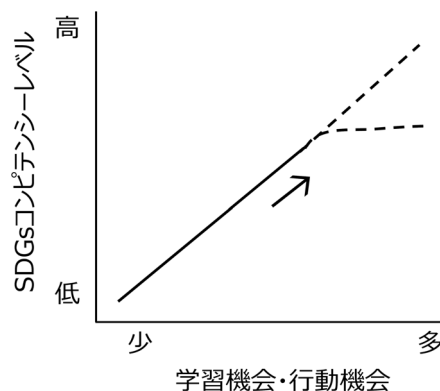


図 4.1 学習・行動機会とコンピテンシーレベルの推移

謝辞

本論文は 2020 年度しあわせ研究費(研究テーマ:武蔵野大学サステナブルキャンパスプロジェクト)の助成を受けたものです。

本研究を進めるにあたり、3大学の学生にはSDGsサーベイおよびアンケートに協力頂き感謝申し上げます。

注釈

- 1 一般に公開されているサーベイでは50問の回答内容は得られない。
- 2 SDGsサーベイの回答は任意であったため、2回目の実施時期に初めて回答する学生もあったが、それらは対象外としている。
- 3 回答者1人で複数の組み合わせ回答があり延べ回答数となる。

参考文献

朝日新聞 (2020) 「SDGs 認知度調査 第6回報告」2020年3月。

(https://miraimedia.asahi.com/sdgs_survey06/ 2021年3月1日アクセス)

薄羽美江(2019)「3つのCSR—SDGsを自分ごとにするSDGs Surveyの可能性について—」『一般社団法人 消費生活総合サポートセンター 令和元年度全国消費者教育ネットワーク会議 実施報告書』2019年3月, pp.9-12。

(https://www.c-support.or.jp/page/%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8_20200516.pdf 2021年3月1日アクセス)

薄羽美江 (2021) 「エシカル教育推進ワーキンググループオンライン自己診断ツール JEI SDGs Survey 実施調査 2018-2020 報告」2021年2月。

(<https://www.jeijc.org/ethical-summit-week/> 2021年2月8日アクセス)

川久保皓史・杉浦康之 (2020) 「生活者アンケートデータからみたZ世代やミレニアル世代の持続可能性に対する意識」日興リサーチレビュー2020年6月。

(https://www.nikko-research.co.jp/wp-content/uploads/2020/06/rr2020_06_0003.pdf 2021年3月1日アクセス)

加渡いづみ・薄羽美江(2020)「SDGs学習の視点から考える持続可能な能力開発のステップ:キャリアデザインのためのコンピテンシーの開発」『消費者教育』40, pp.47-57。

電通 (2020) 「第3回「SDGsに関する生活者調査」」2020年4月。

(<https://www.dentsu.co.jp/news/release/2020/0427-010047.html>
2021 年 3月1日アクセス)

日本エシカル推進協議会(2017)「JEI SDGs online Survey」。

(<https://www.jeijc.org/topics/jei-sdgs-online-survey/> 2021 年 3月1日
アクセス)

Edelman (2019) NEW SURVEY REVEALS STRONG SUPPORT OF UNITED
NATIONS FROM MILLENNIALS AND GEN Z BUT HAVE LITTLE
UNDERSTANDING OF THE SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS.

([https://www.edelman.com/news-awards/new-survey-reveals-strong-s
upport-of-united-nations-from-millennials](https://www.edelman.com/news-awards/new-survey-reveals-strong-support-of-united-nations-from-millennials) 2021 年 3月1日アクセス)

付表1 SDGs サーベイにおける質問内容 (詳細)

SDGs 想像力

- ・一日に約200円(アメリカドルで1ドル90セント)以下で生活している世界の貧しい人たちと、私たちの生活は関係がない。
- ・世界の共通言語と呼ばれる2030年までに世界の持続可能な開発を実現しようとする17の目標(SDGs)は日本においても取り組む必要がある。
- ・地球上の「誰もおきざりにしない」SDGsの目標を、2030年までに実現することは、どんなに知恵を出して協力しあっても無理だと思う。
- ・「子どもの貧困」は、食べものや住む家がないだけではなく、親が貧しいと子どもが教育を受けることができないという目に見えにくい問題なので、社会全体で解決しなくてはならない問題だ。
- ・質の高い教育とはなにか、誰もが学ぶことができるようになるとなぜいいのか、想像できる。
- ・2030年までに「CO2を出さないようにする」という世界の約束のために、自分でできる行動を毎日忘れずに心がけたい。
- ・買いものをする時には、安いものの方が買いやすいし、その方がたくさん買えるから、値段で決める。
- ・私たちの幸福度に興味がある。
- ・非営利組織 RSPO が、パーム油産業をめぐる7つのセクターの関係者(パーム油生産業、搾油・貿易業、消費者製品製造業、小売業、銀行・投資会社、環境 NGO、社会・開発系 NGO)の協力のもとで運営されていることは、誰にとっても重要だ。
- ・世界のビジネスや私たちの消費の選択によって、外から輸入されるものによって、もともとその土地にあったものが、外来種の繁殖によって次の世代にはなくなってしまうことは問題だ。

SDGs 情報力

- ・異常気象によって大きな災害が起きている「地球環境の危機的状況」について、世界の情報を知っている。
- ・森が豊かな海をつくるといわれるように「水」を守ることは大事なので、川や湖や海を汚すことがないか、山や森がどのように守られているか、地域の人たちと調べることもある。
- ・「土」が守られることは大事なので、どのような種がどのような畑でどのように育てられ、どのような作物が私たちの毎日の食事の栄養になっているか、日本や外国のことを調べることもある。
- ・「女性の活躍」は大事なことで、政治や社会、仕事で女の人たちが自分の意見を述べたり、仕事が評価されたり、給与の差がなく、子育ても男の人と差別がないか、自分の国や他の国との違いを調べて知っている。
- ・世界の科学的に影響力のある権威ある論文に、日本から多くの研究がとりあげられることは、重要な取り組みだ。

- ・野菜や穀物を育てる畑で、その土が栄養のある作物を作れる土かどうか、窒素成分などが管理されているかどうかを知ることは、重要な取り組みだ。
- ・野生の動物や自然の植物、海洋生物の絶滅危惧種が、世界でどのような状態になっているかを調べることは重要だ。
- ・インターネットなどから、世界や社会で何が起きているのか広く調べて、これからの未来、どのように生きていけば良いのか先読みができるように心がけている。
- ・気候変動について、カーボンフットプリントを計算して生活の仕方をよく考えている。
- ・国の差別や人の差別をしないで、相手のことをもっと知りたいと思う。

SDGs 学習力

- ・目の前にあるものが、どこでどのようにして作られたものなのか、アニマルライツ（動物の権利）について考え、何を選んで買えばよいか学びたい。
- ・健康のために栄養のあるバランスの良い食事や、健康に良くないとされるタバコの喫煙について、どのように取り組んだらよいか知りたい。
- ・SDGs は、人間のことだけではなく、地球上の動物や植物、水や大地、森や海、環境、身の回りのすべてがつながりあっていることを知ることができる。
- ・「なんでも使い捨て」することは、地球の資源が将来なくなってしまうことになるので、限りある資源の3R（リユース・リデュース・リサイクル）を工夫している。
- ・災害や困難なことがあった時など、どこが安全で、どこに避難し、誰とどのように連絡を取れば良いか、自分が住む町や学校や職場で、どのようにして「レジリエンス」が守られているか調べて、よくわかっている。
- ・「誰もがやりがいのある仕事につくこと」ができるように、学校に通って学び、自分ができること、得意なことを、人のためにできるように、勉強しつづけている。
- ・「児童労働」による商品を買わないようにするために、どのようにしたらよいか学びたい。
- ・一枚の T シャツなど最終製品ができあがるまでのオーガニック・コットンやウールなどの原料について、オーガニック・テキスタイルの世界標準などから、どのように環境への配慮や社会的な責任があるのか調べたい。
- ・ソーラーパネルを取り入れたり、コンポストの堆肥処理機を取り入れたり、自然の循環の工夫をすとなぜよいか、知っている。
- ・野菜は、色や形がきれいにととのっていないとパッケージがしにくく、見た目にも商品価値がないので捨てなくてはならなくなる。

SDGs 行動力

- ・途上国で作られた作物や製品が、正しく取引されていると認められているフェアトレードのマークがついている商品があれば、必ず選んで買う。
- ・農薬や化学肥料などの化学物質に頼らない、自然界の力で生産されたと認められている有機 JAS マークがついている農産物、加工食品、飼料、畜産物があれば、必ず選んで買う。
- ・「森林」を守る森のエコラベル、FSC マークがついている紙や鉛筆、文房具や家具があれば、

必ず選んで買う。

- ・海や環境や資源を守りながら漁業や養殖の持続可能な環境を配慮した MSC や ASC マークがついている魚、加工品があれば、必ず選んで買う。
- ・地球環境の今について「地球一個分」の暮らしを考えることがある。
- ・環境を守るエコ商品を必ず選んで買っている。
- ・資源ごみは、住んでいる町のルールを守って必ず分別して、しっかりきっちり出している。
- ・電気やガスを無駄に使わないように細やかに工夫し、冷暖房の設定温度も高すぎず低すぎず、バスや電車の交通機関を使ったり、公共施設を使ったり、エネルギー削減を考えて行動している。
- ・生物多様性の保護と人々の持続可能な生活を守る農業や林業、観光業において、環境・社会・経済面の持続可能性から支援しているレインフォレスト・アライアンス認証の商品を、必ず選んで買っている。
- ・地元でとれたり、つくったりする生産物を、地元で消費できるようにすると、環境・社会・経済のために良いから、地元の産品を買うようにしている。

SDGs 達成力

- ・世界では、生まれてくる赤ちゃんが、衛生や栄養が行き届かないと死んでしまうことがあるので、その命を助けることができるよう寄付や援助をしている。
- ・「食べものをムダに捨ててしまう」というフードロスがないように、自分の周りの人たちと工夫して、しっかり実行している。
- ・「みんなで力をあわせるー協働」のために、まわりの人たちと一緒に目的に向かって活動したり、よく話し合い、人の考えをよく聞いて、自分が人のために何ができるか考えている。
- ・「つながりあってできること」のために、自分のことだけではなく、年上の人とも年下の人とも、自分の国の人とも外国の人とも話すことができ、どのような考えがあるのか、その人の立場に立って感じたり考えたりする。
- ・人が生まれて、いくつまで生きることができるのか、その人生をどのように生きるのかを考え、話し合う。
- ・温暖化の原因である二酸化炭素や、大気中の環境汚染の原因となる二酸化硫黄の排出のことなど、世界規模のつながりあいを話し合うことができる。
- ・今住んでいるまちは、住む人たちみんながお互いに知り合い、見守りあい、話し合うことができ、危険がない安全なまちづくりができているので安心だ。
- ・人の自由や平等が守られないようないじめがあった時には、報告する勇気と実行を心がけている。
- ・環境破壊をすることなく、広く社会の人の幸福のために、正しく嘘のない仕事をしている会社を調べて、その会社をもっとよくなるように人に伝えたり、その会社の商品を選んで買っている。
- ・SDGs をヒントにして、私たちの未来がどのようなようになるのか、私たちの環境・社会・経済のことを考えて、新しい情報をわかちあい、真剣に話し合っている。